朝日新聞　2011/4/10

沿岸の避難ビル、命守った

早稲田大学・柴山知也教授（海岸工学）

いまある津波防波堤や防潮堤は、100年に2、3回の中程度の津波を防ぐのには役立つが、数百年に1回の今回のような震災では限界がある。多少の軽減効果など、さほど意味は持たない。

では、防波堤の強化やかさ上げは、どこまでやればいいか、結論はなかなか出せるものでもない。

現在は、中規模津波を防ぐため、破損した防波堤の修復に予算を割くべきだ。現実的には、沿岸の小さい集落は高台へ移住せざるをえないだろう。

今回の津波で、効果を発揮したのは津波避難ビルだ。国の指針では鉄筋コンクリート3、4階以上が目安になっている。現地調査した宮城県南三陸町の沿岸にあった津波避難ビルは町が整備した。4階建ての屋上に避難した住民のひざ上71センチまで浸水したが、命は守れた。できれば、6階建て18メートル以上に整備し、住民への周知を徹底してもらいたい。